

【資料 1-4-③】

全国の過去の地震災害事例

発生年月日	地震規模	地震名	津波	最大震度	災害の内容
明応 7 (1498) 年 8 月 25 日	8.4	明応地震	○	7	室町時代後期の明応年間に起こった大地震。文献や発掘調査などから、東海・東南海・南海の三連動地震によるものと考えられている。高さ 4 メートルから 10 メートル程度の津波が房総半島から紀伊半島にかけての沿岸を襲った。
慶長 9 (1605) 年 12 月 16 日	7.9	慶長地震	○	7	地震動による被害はほとんどなく、津波が房総、伊豆、紀伊、四国、九州を襲った。記録から推定される津波の高さは、房総と紀伊、四国で高く、静岡県沿岸で比較的低い。八丈島にも津波が襲って死者 57 人を出した。以上のことからこの地震は、房総沖(北緯 34.3°、東経 140.4°、マグニチュード 7.9)と紀伊水道沖(北緯 33°、東経 134.9°)に同時に二つの地震が発生したのと考えられてきたが、南海トラフ沿いの遠州灘はるか沖合に一つの巨大地震が起きたという考えも出ている。
宝永 4 (1707) 年 10 月 28 日	8.6	宝永地震	○	7	日本の歴史上最大級の地震。マグニチュードは 8.6 と推測される。遠州灘(えんしゅうなだ)沖と紀伊半島沖を震源とする二つの大地震が同時に発生したと考えられ、東海道・伊勢湾・紀伊半島が最も大きな被害を受けた。死者約 2 万人。家屋倒壊約 6 万戸、流失約 2 万戸といわれる。
嘉永 7 (1854) 年 12 月 23 日	8.4	安政地震	○	7	安政年間(1854 - 60)に起こった地震で、次の三つが著名。1854 年 12 月 23 日(安政 1 年 11 月 4 日)午前 9 時すぎに安政東海地震(安政地震 I)が遠州灘沖に発生した。震央位置は北緯 34°、東経 137.8°、震源域は遠州灘沖から駿河湾内の全長 200km 以上の海域におよんでいることが明らかとなった。有感地域は岩手県から九州におよんでいる。被害のひどかったのは、沼津から浜松に至る沿岸よりの地域と、富士川沿いに甲府盆地におよぶ地域である。
明治 24(1891)年	8.0	濃尾地震		6	1891 年 10 月 28 日、岐阜・愛知を中心に起きた大地震。死者 7273 人、全壊家

10月28日					屋約14万戸。明治年間最大の地震で、根尾谷断層が出現。この地震を機会に震災予防調査会が発足した
明治 29(1896)年 6月15日	8.2	明治三陸 地震	○	2~ 3	ゆっくりとした長い揺れで震度はさほど大きくなかったため、ほとんどの人が早期避難しなかった。35分後、大津波が三陸沿岸を襲い、死者約2万2千人、家屋流失1万軒弱。大船渡市の一部では津波の高さは30メートルを超えたとされる。
大正 12(1923)年 9月1日	7.9	(関東大 震災)	○	6	大正12年(1923)9月1日午前11時58分に、相模湾を震源として発生した大地震により、関東一円に被害を及ぼした災害。家屋倒壊に火災を伴い、全壊約13万戸、全焼約45万余戸、死者・行方不明者約14万名。震災直後の混乱の中で、亀戸事件・甘粕事件が起き、また、多数の朝鮮人が官憲・自警団によって虐殺された
昭和 8(1933)年3 月3日	8.1	昭和三陸 地震	○	5	岩手県東方沖の日本海溝付近では、巨大な地震が起こり、三陸沿岸に大津波をもたらすことがある。津波は明治期の地震がややまさったが、地震動は昭和期がはるかに強かった。明治期は規模のわりに地震動が弱い特異な地震であり、地震の原因である断層の運動が通常の地震よりも遅い速度で進行したものと考えられている。津波の被害が大きい原因は、地震の規模もさることながら、三陸沿岸のリアス式の海岸地形が、湾奥での津波の高さを著しく増大させるからである。
昭和 18(1943)年 9月10日	7.2	鳥取地震		6	鳥取市を中心に大きな被害を及ぼした。死者1083人。家屋全壊7485戸。また、この地震によって長さ8キロメートルの鹿野(しかの)断層と、同4.5キロメートルの吉岡断層が出現した。
昭和 19(1944)年 12月7日	7.9	東南海地 震	○	6	東海・近畿地方を襲った。熊野灘沿岸で6~8メートル、遠州灘沿岸で1~2メートルの津波が発生。紀伊半島東岸では30~40センチメートル地盤が沈下した。死者・行方不明者1223人。
昭和 20(1945)年 1月13日	6.8	三河地震	○	5	死者約2,000人、家屋倒壊5,500余戸。軍需産業地域の直下で起こったためマグニチュードに比して大きな被害が出た。約一か月前の東南海地震の震源域の東北隣接域で発生したものの。
昭和	8	南海地震	○	5	九州・近畿・中国・四国にわたり大被

21(1946)年 12月21日					害を与えた地震。南海道地震とも。震源地は潮岬南西方50km付近。大津波があり、室戸岬で1.27m、足摺岬で0.6m地盤が隆起し高知や須崎で1.2m沈下して水田15kmが海面下に没した。
昭和 23(1948)年 6月28日	7.1	福井地震		6	福井市における典型的な直下型地震で家屋への被害が多く、死者約3,900人。
昭和 35(1960)年 5月23日	9.5※1	チリ地震 津波	○	-	チリ近海で発生。太平洋を経て巨大な津波が日本を襲った。三陸海岸を中心に全国で142人の死者・行方不明者が出た。東日本大震災の被災地が被害を受け、宮城県旧志津川町(現・南三陸町)で41人、岩手県大船渡市で53人が犠牲になった。
平成 7(1995)年1 月17日	7.3	(阪神・ 淡路大震 災)	○	7	神戸市を中心とした阪神地域に被害を及ぼした災害。死者約6400人、家屋全半壊約24万9000棟、家屋全半焼約7100棟で、鉄道・高速道路なども大きな被害を受けた。
平成15年 (2003年) 9月26日	8.0	十勝沖地 震	○	6弱	釧路沖を震源として発生した逆断層型プレート間地震。北海道から東北地方の太平洋沿岸に最大約4メートルの津波が襲来し、被害を及ぼした。
平成16年 (2004年) 10月23日	6.8	新潟県中 越地震		7	逆断層型地震。北魚沼郡川口町(現長岡市)で震度7を観測した。大規模な余震が続き、地震発生前の長雨による地盤の緩みと重なって、地滑りなどの被害が拡大した。
平成19年 (2007年) 3月25日	6.9	能登半島 地震	○	6強	逆断層型地殻内地震。マグニチュード6.9。石川県内の3市町で震度6強を観測。住宅全壊が600戸、半壊が1500戸をこえる被害をもたらした。
平成19年 (2007年) 7月16日	6.8	新潟県中 越沖地震	○	6強	逆断層型地殻内地震。新潟県3市村と長野県1町で最大震度6強を観測。柏崎刈羽原子力発電所も被害にあった。死者15人、負傷者2000人をこえる。
平成20年 (2008年) 6月14日	7.2	岩手・宮 城内陸地 震		6強	岩手県奥州市と宮城県栗原市で最大震度6強を観測。土砂災害による被害が大きく、400人をこえる死傷者が出た。
平成23年 (2011年) 3月11日	9.0	東北地方 太平洋沖 地震	○	7	三陸沖を震源として発生したマグニチュード9.0の地震。宮城県栗原市で最大震度7を観測。巨大津波を引き起こし、沿岸部を中心に甚大な被害が出た。津波は東北地方の沿岸部では最高潮位9.3メートル、遡上高40.5メートルに達する巨大津波が発生した。本震後も、

					岩手県沖から茨城県沖の広い範囲で余震が多発。死者・行方不明者は約1万9000人とされる。
平成28年 (2016年) 4月14日 4月16日	6.5 7.3	熊本地震		7	熊本県を中心に、多数の家屋倒壊、土砂災害等により死者64名、重軽傷者約1,816名の甚大な被害が出た。電気、ガス、水道等のライフラインへの被害のほか、空港、道路、鉄道等の交通インフラにも甚大な被害が生じ、住民生活や中小企業、農林漁業や観光業等の経済活動にも大きな支障が生じた。
平成30年 (2018年)	6.7	北海道胆振東部地震		7	震源地：胆振地方中東部 マグニチュード：5.8 震源の深さ：33km 住家全壊 462棟 住家半壊 1,570棟 住家一部破損 12,600棟など 死 42人、負 762人 ・数日前からの降雨により地盤が緩んでいるところに地震が発生したため、土砂災害を誘発した。また、北海道の発電所が停止したことにより、北海道のほぼ全域でブラックアウト（停電）が発生した。

※1 地震の規模（マグニチュード）、ただしチリ地震津波はモーメントマグニチュード。

※2 1922年以前の地震の震度については気象庁の震度データベースには収録されていないため、地震の最大震度については、地震報告・地震年報・気象要覧（中央气象台）によるものを括弧付きで記載している。なおこの期間の震度は、微・弱・強・烈の階級で記載してあるので、これに対応する震度を、1～6におきかえて表現してある。